

「Human」と「貢献心」

——「Human」（NHKスペシャル取材班、角川書店 2012）をどう読むか

加藤尚武

「Human」は、かつてラモン・コフマン「世界人類史物語」（神近市子訳、岩波文庫）が描き出したような「人類」の成立史である。第1章「協力する人」に「協力」と「分かち合い」が人類の生存戦略であったという学説が紹介されている。第二章は攻撃的行動、第三章は農耕、第4章は金銭を扱っている。

1、チンパンジーと人間の協力の仕方の違い

もっとも重要な第1章「協力する人・アフリカからの旅立ち——分かち合う心の進化——」のサワリはチンパンジーと人間の協力の仕方の違いを指摘している点である。

「サン」（ブッシュマン）研究の権威、トロント大学名誉教授リチャード・リー博士の発言「どんな文化でも人間は、分かち合う環境で育ちます。分かち合いの精神が自然に身につく実行できます。児童心理学の研究から次のようなことが分かっています。人間の乳児の最初の行動のひとつは物を拾って口のなかに入れることです。次の行動は拾ったものをほかの人にあげることです」42頁

「私は分かち合うことが人間を人間たらしめている基本的な行動のひとつだと思います。大人になると、貯え込むこと、所有することなどを学びます。しかし、乳児たちの世界では分かち合うことが基本的なパターンです。分かち合うことは成功の継認だともいえます。たとえば、人口の半分が食料を分かち合い、後の半分が食料を貯め込むとします。前者の生存の可能性は後者よりも、ずっと高くなります。それゆえ、分かち合って生きることは自然淘汰の一例だと思うのです」42頁

「確かに、分かち合いの精神が生きている狩猟採集の世界でも、環境が悪くなったときには、わずかな食料源をめぐる対立が増えた可能性も見逃してはならないと思います。私は人間が進化させたもののひとつに柔軟性があると思います。人間の行動は、ほかのどんな生物の行動よりもはるかに幅が広いのです」43頁

「ひとつの方向に作用するだけではないのです。人間はほかの種と比べてもっとも協力的ですが、マイナス面もあります。人間の対立はほかの動物の対立に比べ、ずっと致命的です。2匹の犬がケンカをすると、負けそうな犬が喉を見せれば相手の犬は容赦します。そのジェスチャーで犬の攻撃心はおさまります。しかし、人間の場合には通用しないようです。人間は命乞いをして、殺されることがあります。人間の持つ柔軟性は、協力と対立の両方向へ作用します。人間の悲劇的な定めなのです」43頁

京都大学霊長類研究所の山本真也博士の実験。

「隣り合うふたつのブースに、それぞれチンパンジーを入れる。ふたつのブースには、異なる課題が仕込まれている。片方には、ストローを使わなければジュースを飲めない容器が置いてあり、もう片方には、ステッキを使って引き寄せないとジュース容器が取れない

いという状況になっている。しかも、ストローが必要なチンパンジーのブースにはステッキがあり、ステッキが必要なほうにはストローがある。つまり、必要な道具が逆転しているという状況にしてあるのだ。お互いに協力しなければ、両者ともジュースを飲むことはできない。・・・

観察の結果、全体の 59%において、道具の受け渡しが見られた。つまり、困っている相手に対して道具を差し出したのだ。疑い深い人なら、「遊びでやっているのではないか」と突っ込むところだが、そんな突っ込みに対する反論も山本さんはきちんと調べていた。相手が道具を必要としていない場面では 0・3%しか受け渡しは見られなかったのだ。つまり、遊びで渡しているわけではなく、相手が必要としているから渡していたと推定できるのだ。

ただし、細かく観察すると、受け渡しの 74・7%は、相手の要求に応じる形で起こっていた。たとえばステッキの欲しいチンパンジーが、ステッキを持っているチンパンジーに対して、道具を要求する。穴から相手に手を差し伸べ、道具を要求する。相手がなかなか渡してくれないと、パネルや手を叩いたり、声を出したり、道具を持っている相手の注意を引こうと懸命だった。たいていはこのように要求されて初めて、道具を差し出したのだ。

山本さんはこの実験の要点をこう話してくれた。

『チンパンジーの利他行動には、相手からの要求が重要なようなんです。ヒトは他人が困っているのを見ると、頼まれなくても自ら進んで助けることがあります。チンパンジーは相手からの要求があって初めて助けることが多い。実際、手の届かない場所に置かれたジュースの容器に必死に手を伸ばす相手を見ても、持ったステッキを自発的に差し出すことは希なんです。頼まれれば応じるが、自分から進んでお節介を焼くことはない。これがチンパンジーの利他行動の特徴かもしれないと思うんです』

もうひとつ、大きな特徴があった。山本さんは、片方のチンパンジーしか道具を持っていない状況でも実験を行った。このケースでは、道具を渡す側には、メリットはない。自分が道具を渡す代わりに、自分が欲しい道具を貸してもらおうという交換条件が成り立たないのだ。つまり、何の見返りもないという状況になる。

こうした場合でも、チンパンジーたちは要求されれば道具を渡す行動は継続した。まさに利他行動がチンパンジーにもあることを示している。

ところが、私たちから見て、もっとも大きな違和感はそのあとだった。相手に借りた道具でジュースをせしめたチンパンジーはおいしそうに自分だけで飲み干してしまったのだ。」 49-51 頁

京都大学霊長類研究所の松沢哲郎博士の言葉。

「われわれの言葉では、互恵性っていうんですけれども、助け合っていうのは、"助け合う"でしょう。"助ける"じゃないんですよ。チンパンジーだって助けることはあるんですよ。お母さんが子どもを助ける。引っ張り上げてあげる。母子で一方向的に助けることはあるけれども、子どもはお母さんを助けないんです」 54 頁

「もし、お皿に苺が山盛りになっていたとしましょう。2歳の子どもの口にお母さんが苺

を入れる。喜んで子どもは食べます。すると、必ず子どもは苺を持って『お母さんにもあげる』ってやりますよ。これは人間の本性です。人間として生まれて持ったもの。いただく、それを返す。相手に進んで差し出す。そういう志を持って人間は生まれている。それは文化が違って時代が違って変わるところはないですね。人間は本性として人を助けるようにできているんだと私は思います」 54 頁

「チンパンジーの場合、明らかに私たちとは違うところがあって、いま目の前にある、この世界に生きているという制約が強いのです。瞬間記憶もその生き方のために必要な能力です。だから、チンパンジーはいま目の前にあるこの世界のことについては、共感を持つことはできると思うんです。しかし、目の前にないものについて共感するのは難しいと思います。たとえば、地球の裏側のチリで起こっている、その人々の苦しみを我が苦しみとするとか、生まれる以前にあった、広島、長崎、沖縄のような悲劇に遭った人々に思いをはせるとかは、人間でなければできません」 56 頁

「いまこの時点にだけ限ると、自分には得るものがないけれど、ステッキを渡す。渡すことによって、その人が食べ物を手に入れて幸せになる。その時点ではまだ私に幸せはないんだけど、共感する能力があれば、その時点での他者の気持ちが、自分の気持ちになるんですよ。他者の喜びを、我が喜びとできる。それが、共感するということです」 56 頁

「結果的に自分のほうに幸せが戻ってくるのがつづけば、助け合う関係がはじまることとなります。だから、情けは人のためならず、という先人の知恵もあるわけでしょう。しかし、その関係が了解されるまでのあいだ、一方的になるかもしれない親切を施す必要があるわけです。その壁を乗り越えるためには、基本的に、想像する力が過去や未来に広がるのと同じように、他者にまで広がっていくことがカギなのです」 57 頁

松沢哲郎の著作「想像するちから」（岩波書店 2011 年 77-79 頁）にある次の文章も、重要である。

「社会的知性発達の四段階

四段階が出そろったところで、ここまでの話をまとめよう。

- ①生まれながらにして、親子のあいだでやりとりするようにできている。
- ②一歳半頃になると同じ行動をするようになり、行動が同期する。
- ③行動が同期するなかで、逸脱した行動、自分がしたことのない行動があると、だいたい三歳ぐらいから真似る。明らかに新しい行動レパトリーを真似る。行動を真似ると、他者の行動の結果を自分も体験するので、その体験をもとに、他者がやっている行動を見ると、その結果どういう心の状態になっているかを理解する基盤ができる。
- ④模倣を基盤として、相手の心を理解することができるようになる。そこではじめて「手を差し伸べる」という利他的な行動が現われる。あるいは相手の出方がわかるので、「あざむく」というような行動もできるようになる。

サルとチンパンジーと人間とで、この四段階に含まれる、さまざまな行動が見られるかどうかを比べることができる。第一段階でいえば、目と目を見つめ合うか、新生児微笑があ

るか、新生児模倣があるか、といった項目について比べるのである。これまでの実験・研究結果をまとめると、サルはだいたい全部「ない」、チンパンジーはだいたい全部「ある」、人間はもちろん全部「ある」、となる。

つまり、人間が四、五歳になって他者の心を理解するまでの過程のほとんどすべてが、チンパンジーにもある。けれども一つ明確にないものがある。それが、ごっこ遊び(ロールプレイ)や、そこで見られる役割分担と互惠性だ。

八百屋さんごっこをしよう。あなたが八百屋さんで、私がお客さん。

ブランコで遊ぼう。さいしょに僕が押すから、次は君が押してね。

チンパンジーでは、こうした互惠的な役割分担をするという事実は見つかっていない。利他行動までは、チンパンジーにも色濃く認められる。誰かのために、何かをしてあげる。しかし、それが相互に交代しない。母親は子どもに利他的にふるまうが、子どもが母親のために何かをするということはずまない。せいぜい、毛づくろいのお返しをする程度だ。家族が食卓を囲んでイチゴを食べているとしよう。母親が子どもにイチゴを食べさせる。でも、人間の子供は、一歳をすぎる頃から、「自分で 1」と言って自分で食べるようになる。それだけではない。もうすこし大きくなると、「お母さんもー」と言って、母親にイチゴを食べさせようとする。チンパンジーではけっして見られない行動だ。

人間は、進んで他者に物を与える。お互いに物を与え合う。さらに、自らの命を差し出してまで、他者に尽くす。利他性の先にある、互惠性、さらには自己犠牲。これは、人間の人間らしい知性のあり方だといえる。」

2、互惠性についてのコメント

「互惠性」(reciprocity)は、文化人類学などで使われる訳語で、「相互性」とか「双務性」と訳すこともある。西洋の倫理思想で「黄金律」(golden rule)と呼ばれるものも、相互性の倫理である。「自分にしてもらいたいことを他人にせよ」(肯定形)もしくは「自分がしてもらいたくないことを他人にするな」(否定形)という二つの形がある。新約聖書では、マタイ 7-12、ルカ 6-31に肯定形が、「論語」では顔淵篇 12-2に否定形がある。

ユダヤ教では「あなたにとって好ましくないことをあなたの隣人に対してするな。」(ダビデの末裔を称したファリサイ派のラビ、ヒルレルの言葉)、「自分が嫌なことは、ほかのだれにもしてはならない」(『トビト記』4章 15節)、ヒンドゥー教では「人が他人からしてもらいたくないと思ういかなることも他人にしてはいけない」(『マハーバーラタ』5:15:17)があり、イスラム教では「自分が人から危害を受けたくなければ、誰にも危害を加えないことである。」(ムハンマドの遺言)という格言がある。

近代では、ホブズ、カント、現代ではヘアの倫理学が相互性の倫理を基礎づけようとしている。研究書としてシューメーカー「愛と正義の構造」(晃洋書房)、マッキー「倫理学」哲書房などがある。

文化人類学では、マルセル・モース「贈与論」(1925)が、アメリカ原住民の間にあったとされる「ポトラッチ」の習慣を伝えている。

ここで重要なのは、松沢氏の言葉（57 頁）の「結果的に自分のほうに幸せが戻ってくるものがつづけば、助け合う関係がはじまる。しかし、その関係が了解されるまでのあいだ、一方的になるかもしれない親切を施す必要がある。その壁を乗り越えるためには、基本的に、想像する力が過去・未来・他者にまで広がっていくことがカギ」という箇所である。

「他人に施しをすれば、自分の利益になって戻ってくる」という打算的な相互性が成り立つためには、「打算的な相互性」そのものが共同の掟となって個人に強制力を発揮してはならない。出たくないが、自分が村八分にならないためには、お祭りの寄付をするという関係が成立する。しかし、この相互性が定着する以前の段階では、「見返りがなくても他人を自発的に助ける」という動機が働かなくてはならない。この場合には、純粋に一方的な自発的な贈与の意志があって、相互性が成り立つ。相互性が成り立たなくても他人に贈与する自発性が、相互性を可能にする。

相互性が発生するためには、非相互性が、先に発生してはならない。この「一方的な贈与」の倫理が成立するのは、通常は、親子関係である。親は子どもに無償の贈与をする。この立場を述べているのは、ハンス・ヨナス「責任という原理」（東信堂）である。

相互に贈り物をしておくという関係は、困ったときにはかつての送り主に助けてもらうという時間の隔たりをまたぐ相互性が成立するための条件である。そこで笑顔を交わす、挨拶をする、贈り物をするという習慣があるかないかが、重要なカギをにぎる。

3、「心の理論」(theory of mind) と瀧久雄の「心質的本能」

「Human」第1章「協力する人」の要旨は、次の文章に示されている。

「取材を進めるうちに、『協力』という言葉が番組のテーマになりつつあった。ここでざっと振り返っておこう。考古学と文化人類学の研究から見えてきたのは、人が最初に共有した心といえるのが、『分かち合う心』ということだった。その心を表現するために、私たちの祖先は装飾具を贈り合い、身にまとっていたのだ。その『分かち合う心』はチンパンジーとの比較において、人間特有のものであり、その心を生み出したのが草原での厳しい暮らしだったことも浮かび上がってきた。」68 頁

この「分かち合う心」と瀧久雄「貢献する気持ち」（紀伊國屋書店 2001）のなかの「貢献心は本能だ」（同書 72 頁）という指摘とは、実質的に重なり合う。

「本能とは、人間が生きていくために自然から授かった生来の能力であって、目的をもって後天的に身につけるものではない。それは人間の因果律に属し、自然に湧き出してくるものであって、それゆえ人間の合目的律に属するものではない。一方、『貢献心は本能だ』といっても、それは『心』から発する本能であって、食欲や性欲など『身体』からの本能とは異なる。一般的には本能というと食欲や性欲など生理的なものを指すが、これらを『体質的本能』とし、貢献心を『心質的本能』として、一応、色分けしておくことにしよう。ただし、いずれも人間の因果律に属する本能であることに変わりはない。」（同書 72 頁）

心の体質に備わった本能が、存在するならば、人間の心には、自然的な特質として、他

人を意識する、率先して他人のためになることを行うなどの自発性が備わっていることになる。その本能は、「Human」第1章「協力する人」に描かれた、人間とチンパンジーの違いに呼応して、人間には存在するが、チンパンジーには存在しない、または、人間には顕著に存在するが、チンパンジーには顕著ではないといえるだろう。

このような心の自然的特質の s 差異にかんして、最近、有力になって来た学説は、「心の理論」(theory of mind) と呼ばれている。(加藤尚武「哲学原理の転換」未来社、190 頁参照)

「心の理論」という概念を使って、人間の神信仰の発生を説明したジェシー・ベリング「ヒトはなぜ神を信じるのか」(鈴木光太郎訳、化学同人 2012 年) のなかに、「心の理論」の成立事情が説明されている。

ダーウィンによって人間と霊長類との間が、シームレスの連続と考えられるようになった。多くの研究者が、このシームレスの連続を証明しようとする中で逆に不連続の側面が浮かび上がった。それが「心の理論」である。

デイヴィッド・プレマックとガイ・ウッドラフ (David Premack and Guy Woodruff) は論文「チンパンジーは心の理論をもつか?」“Does the chimpanzee have a theory of mind?”. *The Behavioral and Brain Sciences* 1 (4): 515-526. (1978). を発表して、「チンパンジーは心の理論をもつ」と主張したが、さまざまな研究成果によって逆に「チンパンジーは心の理論をもたない」という結論が有力になって来た。「心の理論」という概念はつぎのような内容である。

「私たちヒトはそして多少はゴリラやチンパンジーもかもしれないが『生まれつきの心理学者』になるように進化してきた。私たちの環境のなかでもっとも頼りになると同時にもっとも危険な要素とは、私たち自身の種のほかのメンバーである。私たちの祖先にとっての成功は、自分たちとともに暮らす者たちの心のなかに入り込むことができるか、彼らの意図を見抜けるか、彼らがどこに行こうとしているかを予想できるか、彼らが助けを欲している時に助けることができるか、彼らを挑発することができるか、あるいは彼らを操ることができるかにかかっていたに違いない。それをするには、ほかの人間の側から見るとどう見えるのかというストーリーをもたらす脳を発達させなければならなかった。」ジェシー・ベリング「ヒトはなぜ神を信じるのか」鈴木光太郎訳、化学同人 2012 年、28 頁)

「Human」第1章「協力する人」に描かれた、人間には存在するが、チンパンジーには存在しない心の特性は、「心の理論」であると言うこともできるし、瀧久雄のいう『心質の本能』を「心の理論をもつという特徴」と言い換えることもできるだろう。

4、見えない視覚 (blind or invisible sight)

「Human」第1章「協力する人」に、脳卒中のために全盲になった人に、他人微笑が見えるという実証例がでてくる。(74-79 頁) 当人には、視覚的印象としては見えない。しかし、相手の顔の印象を言い当てることができる。この現象は「盲視」(blind sight) とか

「見えない視覚」(invisible sight) とか呼ばれる。(加藤尚武「かたちの哲学」岩波現代文庫、第17章「無意識の知覚システム」を参照。)

光は目を通じて脳に達しているが、脳が損傷しているために視野欠損が起こっているという人に、その視野欠損の場所に、たとえばランプを点灯すると、言い当てることができる。自覚的には視覚は発生していないが、無自覚的には視覚が機能している。

「Human」76-77頁の内容を要約すると次のようになる。

「脳について、特に意識に関する分野では、私たちの理解していないことがたくさん起きている。本人が意識もしていない、自覚もしていないにもかかわらず、脳のなかでは数々のことが起きている。本人は『実際には見えていないんです。でもなんとなくイメージが浮かぶんです。そのイメージは、私が気に入っていたり、形が美しかったり、面白かったりするのです。その印象で、私は答えているのです』という。

fMRI で、脳の活動場所を確かめた。目から入る情報は脳の中の視覚野へ伝達される。通常なら、ここで一次的な情報分析が行われるはずだ。しかし彼の場合は、この詳細な分析が脳卒中で視覚野の機能が損なわれているからできない。目から入った情報は視床の外側膝状体に送られ、一部は上丘と呼ばれる場所に送られている。上丘からは視床枕を経て、偏桃体へと伝達されていた。

偏桃体は恐れを感じる場所で、ここで情報を処理する。表情に関する情報は視床から別の領域へと伝達されている。第一次視覚野ではなく、視覚処理に関連する別の領域で、この情報が処理されている。上丘、視床枕、偏桃体の伝達路が重要な役割を果たしている。」

この問題は、赤ちゃんの微笑反射の問題にも関係してくる。お母さんが笑うと赤ちゃんが笑うという微笑反射は、全盲の赤ちゃんでも起こるが、やがてその反射が止む。哲学者でこの現象に着目したのは、メルロー＝ポンティであった。

最近ではミラー・ニューロンで微笑反射を説明することもあるが、完全な説明をするには、「母親の気持ちに呼応する」という関係が、生まれつき備わっている、生まれつきの反射が経験を通じて刷り込まれ定着する、「全盲」でも「見えない視覚」が働いている可能性があるといういくつかの条件が必要であるように思われる。(以上)